

平成十九年五月十九日(土)

第三六八回 史跡めぐり

水郷越谷・史跡と緑道

茶屋通り、一里塚、藤助河岸～江戸

時代の旅人ゆかりの地と河畔・緑道を

めぐる半日

～初夏の蒲生から平和橋(市役所)まで～



越谷市中央公民館と市役所

NPO法人 越谷市郷土研究会

第三六八回 史跡めぐり(半日コース)

水郷越谷・史跡と緑道

茶屋通り、一里塚、藤助河岸、江戸時代の
旅人ゆかりの地と河畔、緑道をめぐる半日

初夏の蒲生から平和橋（市役所）まで

日 時 平成十九年五月十九日(土)

集
合
蒲生駅前 午前九時

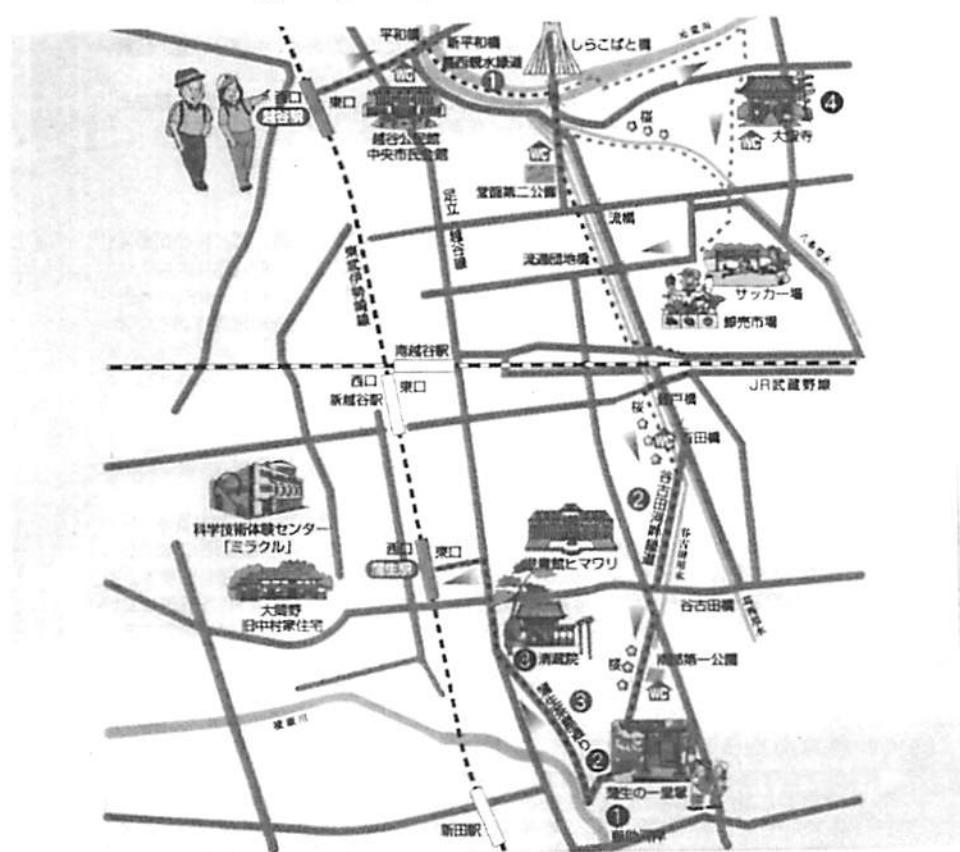
・コース
蒲生駅 → 清蔵院・山門 → 蒲生茶屋通り →

蒲生の一里塚→藤助河岸→谷古田河畔緑道→瓦曾根溜井→葛西親水緑道→平和橋（徒歩約六キロ・解散十二時予定）

・参加費 三〇〇円（資料代・保険料等）

案内者 幹事 藤川 吉洋

NPO法人 越谷市郷土研究会



◆ 蒲生駅

東武鉄道は明治三十二年（一八九九）八月二十七日から、北千住・久喜間の営業が開始された。

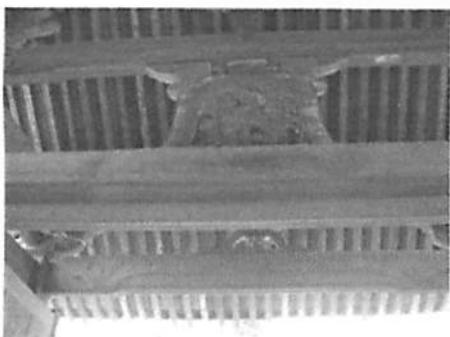
両駅間に、西新井・草加・越谷（現大沢）・柏壁・杉戸の各駅が開設され、客車と貨車の混合列車（客車3・貨車1）で、一日七往復であった。蒲生駅が開設されたのは開業から遅れること四ヶ月、明治三十二年十二月二十日であった。開業当時の蒲生駅は現在の蒲生駅とは場所が違い、新越谷駅の南側、現在のダイエーあたりにあった。その名残として、線路のダイエーの反対側（西側）そばに現在も住んでおられる宮田家は旧蒲生駅のそばに位置していたので屋号を「旧停車場」と呼ばれた。

◆ 清蔵院

蒲生の清蔵院は真言宗智山派で、慈眼山と号し、天文三年（一五三四）祐範という僧が開山したと伝えられています。本尊は、十一面観音です。蒲生清蔵院の山門（市指定有形文化財）は、屋根など部分的に改造されていますが、その棟札により寛永十五年（一六三八）関西の工匠による建立であることが確認されています。ことに欄間に掲げられている龍の彫刻をはじめ、虹梁の彫刻なども江戸初期の素朴な彫刻様式が伺われます。なお、この山門の龍は、巷の伝説では左甚五郎の作といわれ、夜な夜な山門を抜け出して田畠を荒らしたことから、これを金網で囲つたといわれています。

清蔵院

清蔵院山門・龍の彫刻



◆ ぎょうだい様

蒲生一丁目自治会館近くに、蛙か鳥か、河童(かっぱ)のような得体の知れない形の石塔がある。その台石に「砂利供養」と刻まれ、宝暦七年(一七五三)の年号とこの石塔建立の人の名が刻まれている。地元の人々は、「これを「ぎょうだい様」と呼ぶ他に「おか様」または「ぎょうじや様」とも呼んでいる。石塔はこの年に日光街道大修理が行われ、道に砂利が敷かれた記念碑である。また道路の神様といわれ、旅の際の足を痛めないよう、道中の安全を祈つて建てられ、わらじ等が供えられていたといわれ、現在も健在である。

◆ 茶屋通りの道標

奉行地への入り口でもあり、大相模の不動様へ通じる入り口でもある所に、石仏が二体安置されており、その内の一体が通称「不動さま」と云つて付近の人々の愛称になつて現在でも多くの方がお参りされている。台石の表面上に「是より大きがみへ」と深く刻まれ、向かって右側に「時于享保十三戊申九月廿八日(毎月二十八日は不動様の縁日)」、さらに左側には「施主江戸新乗物町講中」と刻まれて居り江戸中期頃かと思われる。江戸の人々が、大相模の不動尊にお参りに行く時の道しるべに、駕籠やさんなどの関係者が先祖の供養の為、建てられたと推測される。との一体は、青面金剛という仏様の他に、日月、鬼、三猿、二鷄が描かれた「庚申様」と呼ばれた石塔です。



不動明王像付き道標

茶屋通り神谷家（蒲生一一五一一路傍）



青面金剛像庚申塔

茶屋通り神谷家（蒲生一一五一一路傍）



◆蒲生茶屋通り

宿場の出入り口や、宿場と宿場の間の街道沿いに、人足や馬が休息し、また旅人も休息をとり身づくりを整えるための場所として、「立場（杖を立てて立ったまま一休みすることから名付けられたと思われます）」が設けられました。立場には、湯茶・菓子や一膳飯・酒肴を提供する立場茶屋が出来て旅人には重宝な存在となりました。藤助河岸は、河岸に出来た立場であり、蒲生愛宕町付近の地名は、江戸時代には「茶屋」と呼ばれており、立場から清蔵院までを蒲生茶屋通りと呼んでいます。

◆蒲生の一里塚（県指定記念物・史跡）

一里塚は江戸時代街道沿いに「一里」として設置された塚で、塚の上に榎・松・杉等が植えられ、道程の目標や人馬賃銭の目安になり、また旅人の休憩の場などに用いられました。現在は高さ2m、東西幅5・7m、南北7・8mの東側一基だけが残っていますが、一里塚は道路の両側にあるもので、蒲生の一里塚もかつては道路（日光街道）の西側にもありました。県内日光街道筋に現存する唯一の一里塚です。

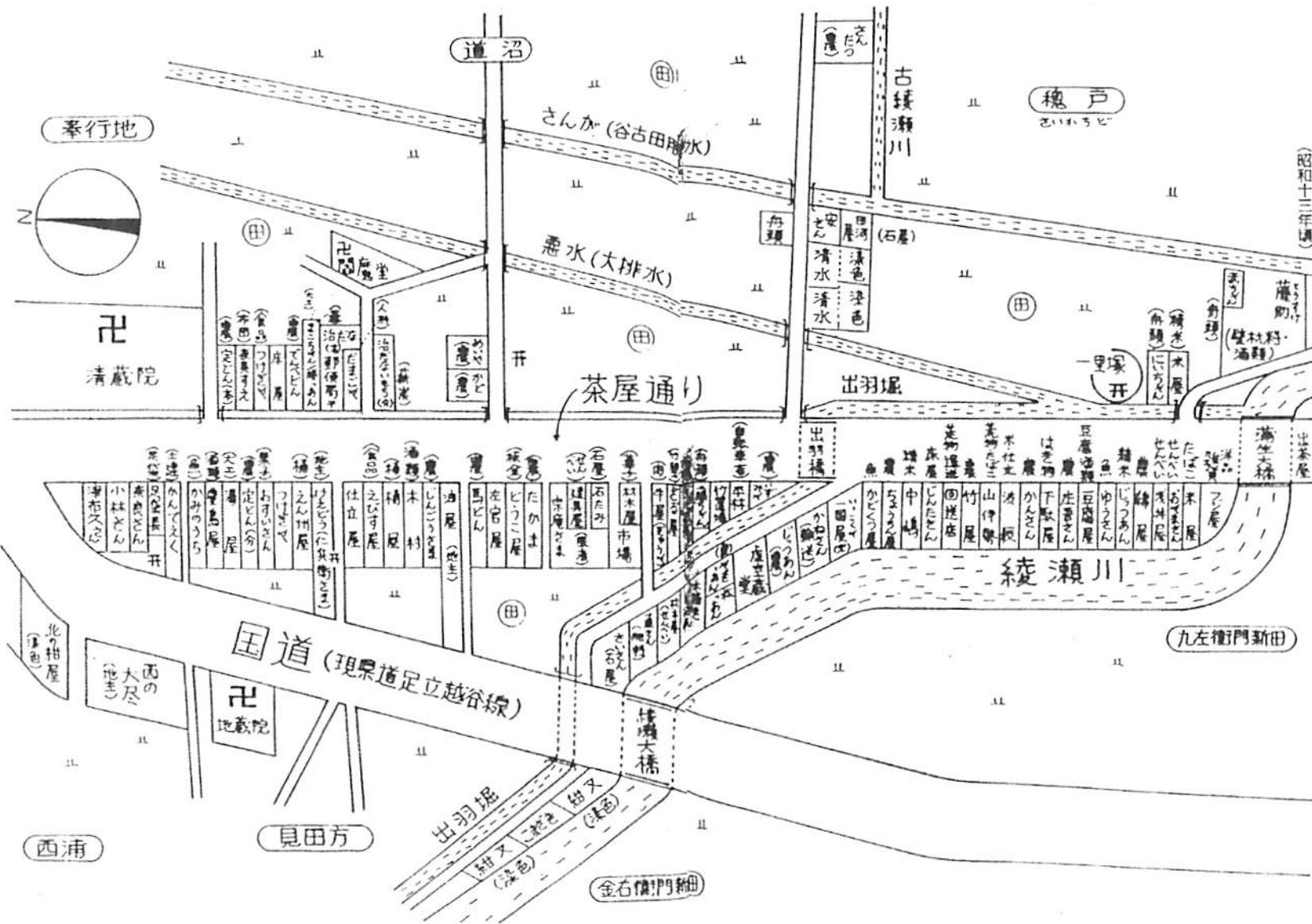


(現蒲生一丁目)蒲生二丁目(蒲生愛宕町近辺)

元凶
高
橋
正
澄

穂 戸
さいわとう

昭和十三年



◆ 藤助河岸

綾瀬川は延宝八年（一六八〇）に小菅
れ排水一筋の流れになりました。この
ました。このうち主な河岸場を挙げる
岸と藤助、足立郡草加河岸などが数え
ます。

「武藏国郡村誌」によると、藤助河岸の
の敷地が九三坪、藤助河岸が四五坪で、



上流、蒲生の久伊豆神社の手前にありました蒲生の半七河岸は河岸場
江戸時代は半七河岸が活発であったようですが、明治に入ると衰退し
られます。

ため舟運には便利な川となり各所に大小数多くの河岸場が設けられ
と、岩槻領の妙見河岸、足立郡戸塚の銀蔵河岸、埼玉郡蒲生の半七河
岸から隅田村までの新水路が疏通されたとともに、川の堰止が禁止さ
ました。一方、藤助河岸は日光道中の往還端で地の利を得ていたためか、荷船十艘、伝馬船十艘、川下小船十九艘を備え、昭和の初期ま
で営業を続けていたようです。これらの舟運は江戸時代中期以降次第に隆盛を極め、荷物の輸送に欠かせない存在となつたが、明治以
降鉄道の開通その他で急激に衰退しました。

◆ 古綾瀬川

現在の綾瀬川の流路は寛永年間の直道改修を伝えるが、それまでは古綾瀬川筋が綾瀬川の主流筋であった。それを裏づけるように古
綾瀬川が武藏国埼玉郡と足立郡境界をなしていたが、今でも古綾瀬と呼ばれる細流が残されており、そこが越谷市と草加市の境になつ
てている。

◆ 谷古田河畔緑道

総延長は瓦曾根堰から草加市境までの3・6kmで、武藏野線北側には健康遊具、バードウォッチング、自然環境を保つ虫元気、南側には

四月から八月にかけてですが、せせらぎモール等があります。春には、桜、こぶしの花が咲き、秋には紅葉も素敵です。また、季節により流通団地内の新緑や紅葉、八条用水緑道の桜を見ながら、大相模の大聖寺へのルートもあります。

○流通団地橋　旧西方地区の東京葛西用水と谷古田用水に架かる橋で西方と流通団地を結んでいます。形が眼鏡のように見える、レンガ張りのモダンなデザインをしています。高欄には、魚がデザインされ、訪れる太公望の目を引いています。

谷古田河畔緑道



流通団地橋



バードウォッチング



○旧「流橋」　現在の流橋のすぐ上流隣に架かっています。今はこの橋に入ることは禁止されていますが、かつては不動に通じる橋でした。橋の周辺は大きく変わり、不動に通じる不動道もなくなり、昔の名残はこの旧「流橋」のみになってしまいました。不動様に行くのに使った橋という点では後世に残しておきたい橋といえそうです。

◆瓦曾根溜井

川の流れを堰止めて水位を高め、各用水路に水を順調に流すために設けられた古くからの用水施設で、当初は慶長年間（一五九六）

一六一五)の開発を伝える。この溜井からは同じく慶長年間の開発

二九)新開の西葛西用水、延宝八年(一六八〇)新開の谷古田用水、

宝三年新開の本所上水が引水され、下流領域数万石の田畠を養う

◆葛西親水緑道

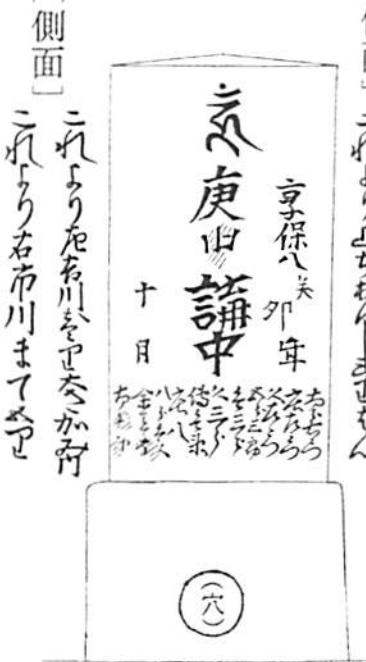
総延長は柳町から瓦曾根までの2・6kmで、チューリップ等、四季を通して花が楽しめる花壇、花菖蒲、アジサイ等や裸足で歩く健康ロードがあります。4月下旬から8月にかけて釣りが楽しめます。

○葛西用水取水口そば路傍の石仏

西方村の周辺は、近くは元荒川の下流にある大相模の不動尊や吉川、元荒川の上流にある慈恩寺(現、岩槻)、遠くは上総の市川(現、千葉県市川市)との人々の交流が見られていたであろう。ここから市川市へ行く道筋は、当時も既にあった葛西用水路(下流は現在の曳舟川につながる)に沿って南下したのであると、この石塔が今日まで残っていたお陰で推定できる。なお、葛西用水の東側隣に平行に南下して流れていた本所上水(下流は龜有上水)は、前年の享保七年に廃止となっている。

〔側面〕ニレよりよぢかへどモゼム

道標付き文字庚申塔



葛西親水緑道



を伝える四ヶ村用水、八条用水、寛永六年(一六三九年)には廃止されたが延寶三年(一七二二)には再び開通した。水源地として重要な機能を果たした。



○ 瓦曾根溜井・瓦曾根堰の譜

この溜井は、慶長一九年頃（一六一四年）、徳川幕府が八条領と四ヶ村（瓦曾根、西方、登戸、蒲生）の地域の水田用水として利用するため荒川の流れをこの地で堰止め溜井としたことが始まりであり、その貯水面積は一〇ヘクタール余に及んだ。この時は、荒川の流水を利用していたが、寛永六年（一六二九年）に幕府の治水対策で荒川の西遷が行われると元荒川となり、流水が激減し、溜井が枯渇した。そこで、水源を庄内領中島の利根川（現在の江戸川）に求め、用水路を開削して古利根川に導水し、松伏堰で堰上げて溜井とし、鶴後用水（逆川）によって瓦曾根溜井に送水する、いわゆる中島用水が翌寛永七年に造られた。この後寛永八年には葛西井堀が開削され、龜有溜井（現在の東京）まで送水されるとともに、延宝三年（一六七五年）には本所上水が引かれ、生活用水としても利用された。

この中島用水も宝永元年（一七〇四年）の大洪水によって庄内領内の水路が埋没してしまったため、享保四年（一七一九年）に利根川の川俣の幸手領用水堀樋を増設して琵琶溜井を通して古利根川に水を入れ、瓦曾根溜井へ導水するようになると、この溜井の水源は幾多の変遷を経ながら下流村々の用水源として利用された。

瓦曾根堰は水害等で何度も修復され、大正一三年これまでの石堰を廃止し鉄筋コンクリート造り鋼製水門（一〇門）の堰が築造され、管理のため塗装した鏽止めの色彩が朱色であったため「赤門」と呼ばれ、地域の風景の一部として親しまれていた。この溜井や瓦曾根堰も時代と共に変貌をとげることになるが、特に、この堰止めによる上流の岩槻市・越谷市の一部地域の排水不良等の改善が求められ昭和四一年逆川の元荒川合流点より瓦曾根堰までを瀬割堤にし、元荒川と瓦曾根溜井の用排水を分離し現在の形が造られ、溜井の規模も縮小した。更に平成九年には、葛西下流地盤沈下対策事業で旧堰を取り壊し、新堰二門を造成した。

葛西用水路土地改良区と越谷市では、この地に永年親しまれてきた溜井と堰の歴史を記し、併せて先人の労苦と英知を後世に引き継ぐべく、記念の譜として碑を建立する。

鳥文斎栄之の「瓦曾根溜井図」



上図とほぼ同じ場所から撮った現在の風景

主な参考資料

- ふるさと蒲生の歴史ものがたり
- 越谷ふるさと散歩
- 郷土越谷散策マップ 案内図
- 高橋正澄氏資料
- 加藤幸一氏資料